

金代仏教の社会的考察

— 名額発売にみえる地域経済 —

桂 華 淳 祥

金朝が宗教々団を対象として実施した経済政策に名額・度牒・紫衣・師号の発売がある。この中で名額の発売事項を取りあげて、金代における仏教々団の活動と地域社会との関係の一端をみてみたい。

名額とは、寺院・道観の名を書いた額で、政府からこれの発給を受けなければ正式な寺院・道観とは認められないというものである。このような名額を金銭等によって売り出す、いわゆる名額の発売の起源は明確ではないが、金代においてそれが実施されていたことは『金史』等の記事によって明らかである。その目的としては、多くの場合、国庫の補充・軍資金の調達であり、或いは餓飢求済という社会政策的な場合もみうけられる。

さて、この名額の発売について最も詳しく知ることができるのは諸々の石刻資料に散見する名額牒である。名額牒は金代に限らず、それに先行する宋代にも認められるが、牒文に発売の金額を明示するなどはつきりと発売の事実が認められるのは金代のものであり、その名額牒の形式もほぼ一定である。またその発売地域は金国領内ほぼ全域におよんでいるのである。ところで、このように領内ほぼ全域に実施された名額発売に関して、石刻資料にみえる名額牒によってその分布状態をみるに、

河北地方 三件

河南地方

二件

山東地方

四件(含道観二件)

山西地方

一七件(含道観五件)

陝西地方

五件

となっており、ここにみる限り特に山西地方に多く認められるのである。思うに、名額が発給されるにあたっては、当然のことながらそれを受ける未許可の寺院が存在していたはずであり、その寺院の維持やここに至って名額を購入したことなどを考えあわせると、名額発売の多いこの山西地方には、以前より寺院存続の基盤があったことがうかがえる。また山西地方といえは、金代の仏教界の動向の上でみのがしてはならない事跡がある。すなわち金刻大藏経の開版がそれである。蔣唯心氏の『金藏雕印始末考』によれば「金刻大藏経は皇統七・八年より大定十余年にかけて、山西地方の幾多の有志の出資によって雕造されたものである」と報告されている。このように名額発売の地域や大藏経雕造の場所などから、山西地方において仏教界の活動が盛んに行なわれていたことが認められるのである。

では何故にその地方にこのような仏教界の活動が盛んに行なわれたのであろうか。その理由としてはもとより深い信仰心が不可欠なものとしてあげられるが、これを精神的面での支えとするならば、今一つ寺院の建立・維持・藏経の雕造・名額の購入などを行うのに必要な物資・労働力・経済力といった物質的な支えも忘れてはならない。

ところでこの物質的な援助は、そのほとんどが壇信徒を施主とした布施に依存しており、石刻資料の中には再三、施主として碑文に名が記されている人物も幾人かみうけられる。そしてこれら

施主の経済的基盤については、それぞれの人物について出身・環境等を詳しくみてみる必要があるが、残念ながらそのほとんどが一般民衆のようで、伝もなくその行状は明らかにできない。ただ一・二の人物については、その一族に物品の売買に係わっていた者がいるとみられる点があるがこれも明確にするには至っていない。そこでここでは山西地方という地域性に着目し、簡単にみておきたい。

まず『金史』等によって当時の山西地方の社会・経済の様子を探るのであるが、ほとんどみあたらず、詳しいことはわからない。ただ耕地が少なく、しかも瘠せていたということが知られるのみである。またこのことは、後の明・清時代に編纂された地方誌等によっても知ることができる。例えば『山西通志』巻九九・風土記の条には「土狹民衆」という記載が各地域の記事に多くみえている。これらによると、山西地方は農耕に関しては決して豊かな地方ではなく、したがって大事業に出資できるような経済的余裕などもたない地域のようにみえる。しかしまた、このような地方誌の中には「土狹人満、每挾賫走四方、所至多流寓、其間雖山陝海遼皆有人邑」(『平陽府志』巻二九・風俗)のような記事がみえている。つまり、土地が狭いのに人口が多いので人々はつねに商業活動を行っていたというのである。このことに関しても金代における活動を示す記事はみあたらないが、この地域が明・清時代に至って山西商人といわれる大商人が出現したところであることに留意しなければならない。この山西商人については佐伯富氏・寺田隆信氏をはじめとして詳しい研究がなされており、それに

よれば山西地方に商業が発達した理由として、近代的な交通路が整備される清朝以前は、山西が交通の要衝の地であり、一方、土地が少ないことが住民をして商業に乗り出させる機縁となったと指摘されている。つまり、山西地方は金代を含めた各時代を通して商業活動が行なわれていたところと考えられるのである。さらに中国全般的な商業活動の歴史をみると、特に五代から宋にかけて、貴族社会・莊園経済の没落、農兵の分離などの社会的変化により急速に発展していった。そしてこのことにより交通の要衝には大きな都市が発生するようになったのであり、山西南部地方はまさにその地域にあたるのである。そしてここに取りあげた金代はこのような変革期から下ること約百年という時期であり、この商業経済が安定してきた時ともいえる。このようにみると、金代の山西地方の経済力に関して直接の資料はみあたらないが、宋代と同様な商業活動が行なわれていたということをうかがい知ることができると、そしてそれにもなう利益も少なからず得られたであろうことも、後世大商人が出現したことなどによって知られるのである。

以上のことから、金代における山西南部地域の仏教界の活動には伝統的な仏教信仰とともに、その地域の特徴ともいべき商業活動によって得られた経済力が大きな役割をはたしていたと考えられるのである。すなわち、名額の発売が山西地方に多く、また大蔵経の開版という事業も山西地方で行なわれたことがそれを示す一例といえよう。